

【展示解説資料】

平成 27 年度 盛岡市遺跡の学び館 テーマ展



方八丁を掘る！－志波城発掘史－

会期 平成 27 年 6 月 6 日（土曜日）～9 月 27 日（日曜日）

【開催趣旨】

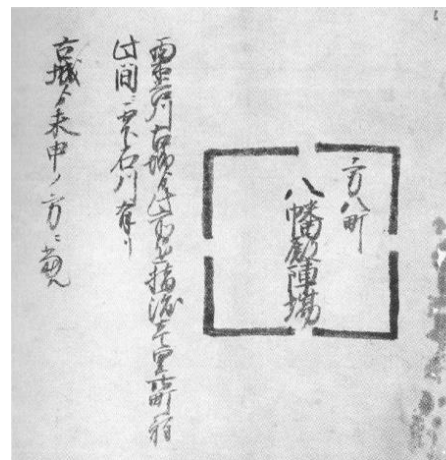
史跡志波城跡は、盛岡・岩手を代表する平安時代初頭の城柵遺跡であり、平成 9 年(1997)の志波城古代公園開園以来、待望の総合ガイダンス施設が、平成 27 年(2015) 3 月にオープンし、多くの市民・県内外の方々に来園していただいています。その志波城跡も、かつては字名から「太田方八丁遺跡」と呼ばれ、幻の城柵の候補地の一つにすぎませんでした。しかし、1970 年代に高速道路が県内にも建設され、それに伴う発掘調査により、巨大な城柵が眼前に現れたのです。関係者の懸命な努力により、重要区域は遺構保存の工法に変更され、「志波城跡」として国史跡に指定されました。現在は史跡の復元整備が進展し、「志波城古代公園」は多くの人々の憩いの場、歴史学習の場、観光資源として活用されています。本展示会では、昭和 51 年(1976)の第 1 次調査から 39 年となる今年、「太田方八丁遺跡＝志波城跡」が遺跡として、そして史跡としてどのように調査されてきたかを振り返り、未来に向けて保存・活用すべき歴史文化遺産としての意義を再確認します。

【絵図の中の「方八丁」(近世～昭和初期)】

「太田方八丁」に関する古絵図としては、正保四年(1947)『南部領惣絵図』『方八町 八幡殿御陣場』、寛文八年(1668)『奥州南部領内総絵図』『方八町 八幡殿陣場跡』、天保十二年(1841)『飯岡通代官所管内絵地図』『方八丁』があり、それぞれの辺に開口部をもつ四角い囲いが描かれています。また江戸～明治の文献として、享保四年(1719)佐久間義和『奥羽観蹟聞老志』、享和元年(1801)大巻秀詮『邦内郷村志』、文化四年(1807)頃 三輪秀福・阪牛助丁・梅内祐訓『旧蹟遺聞』、天保(1830～1843)頃 市原篤焉『篤焉家訓』巻十三、明治 12 年(1879)岩手県編纂『岩手県管轄地誌』第一号巻ノ八があり、下太田村の方八丁(町)は前九年合戦時(1051～1062)の源頼義と源義家(八幡太郎)父子の陣場跡とされています。このことから、現在に残る小字名「方八丁」は江戸時代にまで遡るようであり、

現地には土手が残っていると記されています。

大正時代になると、それまでの前九年合戦時の陣場跡説は菅野義之助氏に否定され、『陸奥話記』の記述から、「頼義・義家はこの様な壮大な土塁を築くはずがない」、「頼義は陸奥守として常に多賀城を守る身分で以上の如く厨川の陥落後は永く此の地に止まるべき道理はなく従って斯くの如き城廓を築くはずがない」とし、太田方八丁遺跡の築造年代は前九年合戦時ではない、という主張をしています。大正 14 年(1925)の新聞紙上では、菅野義之助氏や小笠原謙吉氏によって論考が繰り返され、これらを踏まえ、太田方八丁遺跡は「蝦夷征討期の遺跡ではないか」という説が起りましたが、確証がえられぬまま、時代は昭和を迎えます。



「方八町 八幡殿陣場」
栗谷川古城より此所迄指渡志里甘町程
此間栗石川有
古城より未申の方に当る

「寛文八年奥州之内岩手郡栗谷川古城図」

(もりおか歴史文化館蔵)の一部拡大

【板橋源氏の調査(昭和 30～40 年代)】

岩手大学教授であった板橋源氏は、昭和 31 年(1956)に現地を調査し、その成果を『盛岡市史』第 1 分冊(盛岡市 1957)にまとめました。竪穴建物跡や出土遺物について論考を加え、太田方八丁遺跡は二重周廓のある方形プランを持ち、胆沢城・徳丹城と年代的に差はなく、古代城柵もしくは関連施設である、としました。

しかし、古代城柵説は、その後あまり注目されず、昭和 40 年代までの太田方八丁遺跡は、郊外の静かな農村地帯の一面にすぎませんでした。

〔高速道路建設と史跡指定(昭和 50 年代)〕

●高速道路建設に伴う調査と遺構保存

戦後日本の高度経済成長に伴い、全国で大規模開発事業が計画される中、太田方八丁遺跡でも、東北縦貫自動車道建設(日本道路公団)と県営圃場整備事業の計画が持ち上がりました。高速道路はルートが決定すると、岩手県教育委員会が昭和 51・52 年(1976・77)に調査を実施します。これが遺跡の本格的な発掘調査のはじまり(第 1・2 次調査)です。調査区では、南端の外郭線推定箇所から築地堀に伴う柱穴列(※当時は寄柱列と解釈)、櫓と推定される掘立柱建物、堀状の外大溝が次々と発見され、その北部には多数の竪穴建物跡が確認されました。古代史上所在不明となった「志波城」の有力な候補地とマスコミで大きく報道され、ルート変更の声も上がる中、その取り扱いについて、文化庁、県教委、道路公団による協議が持たれ、結果として、重要遺構を盛土で埋没させない高架方式に設計変更となり、予定ルートでの高速道路建設に決着したのです。

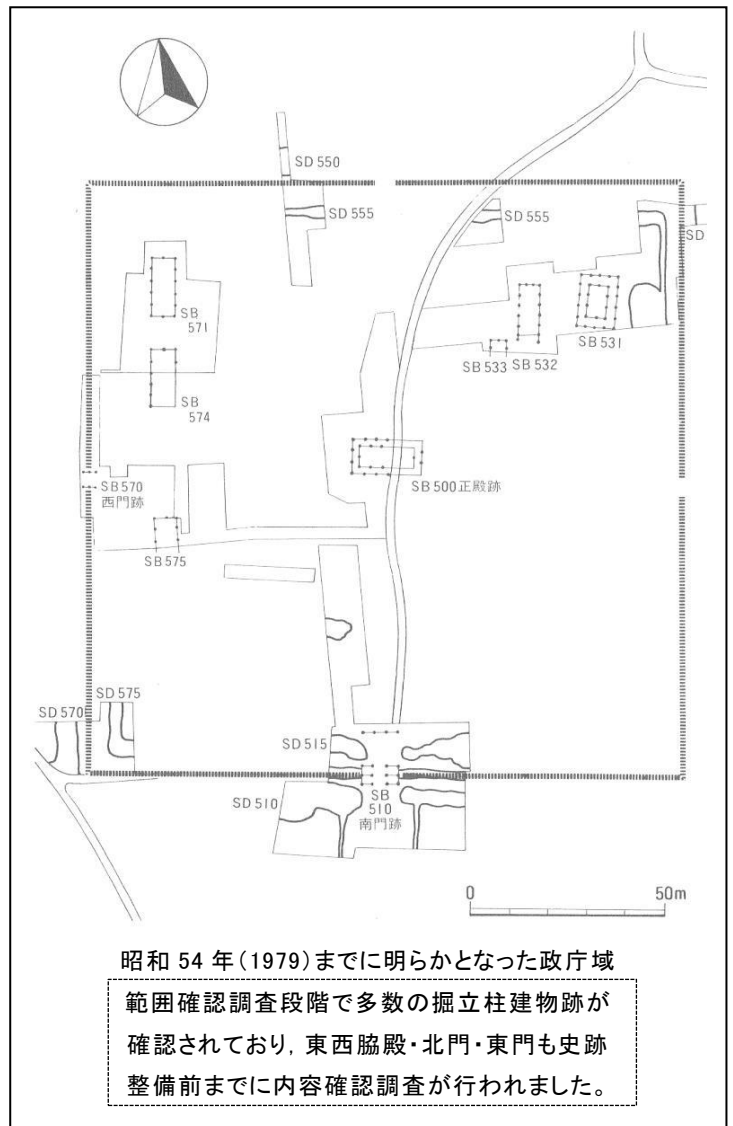
●遺跡範囲確認調査により「志波城跡」へ

当時、岩手日報紙上では文化面ばかりでなく社会面、社説等で太田方八丁遺跡・志波城について報道を繰り返し、調査成果の解説ばかりでなく、岩手を代表する歴史遺産としての保存を呼びかけました。このような中、盛岡市は、太田方八丁遺跡は東北古代史上重要な遺跡であると表明し、計画されている県営圃場整備事業や、将来の都市化に対応するため、遺跡全体の範囲と性格について早急に把握することとしました。盛岡市教育委員会では、初の埋蔵文化財担当専門職員を採用して遺跡内に発掘調査事務所を設け、国庫補助事業として昭和 52～54 年(1977～1979)の第 1 次 3 ケ年計画により遺跡範囲確認調査を実施。専門家による調査委員会の指導の下、政庁(当時は「内城」)域、外郭南辺・東辺・西辺を重点的に調査しました。特に政庁域では、当時調査委員会の委員長であった奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮調査部長の工藤圭章氏の強い意向により、あえて主要箇所調査区が設定され、政庁南門跡(SB510)、西門跡(SB570)、正殿跡(SB500)、北部掘立柱建物群(SB531～533, 571, 574)と大きな柱掘方をもつ大規模建物が次々と発見されました。発掘現場では、調査成果を速報で周知するため、ガリ版刷りの調査速報「太田方八丁」が準日刊で配られました。そのような精力的な調査の結果、太田方八丁遺跡は、胆沢城跡や徳丹城跡と同様に古代東北の城柵遺跡の類型に該当し、「日本紀略」「日本後

紀」に記述のある「志波城」跡であると考えて矛盾がない、との結論が得られ、遺跡名称は「志波城跡」に改められました。

●圃場整備に伴う調整・調査と国史跡指定

盛岡市では、志波城跡の国史跡指定をめざし、昭和 55～59 年(1980～84)の第 2 次 5 ケ年計画で内容確認調査を行い、外郭南門跡(SB110)、南東官衙建物跡(SB220～223)、政庁北門跡(SB550)などが確認されました。一方、県営圃場整備については関係機関と調整を行い、基本方針として政庁周辺・南大路・外郭南辺は地区除外、それ以外の田畑や道路は盛土して地下遺構を保存し、新たな畦畔は遺跡の軸線方向に合わせることとなりました。しかし、排水路については発掘調査が必要となり、遺跡西半部を県埋蔵文化財センターが、東半部を市教委が調査を担当。竪穴建物跡が多数発見され、一部は設計変更により保存措置がとられました。圃場整備工事は昭和 58 年(1983)に完了し、翌昭和 59 年(1984)9 月 14 日、文部省告示第 122 号によって、約 63 万 5 千㎡が国史跡に指定されました(東北縦貫自動車道用地・県道盛岡和賀線用地・鹿妻新堰用地・市道官台線用地除く)。



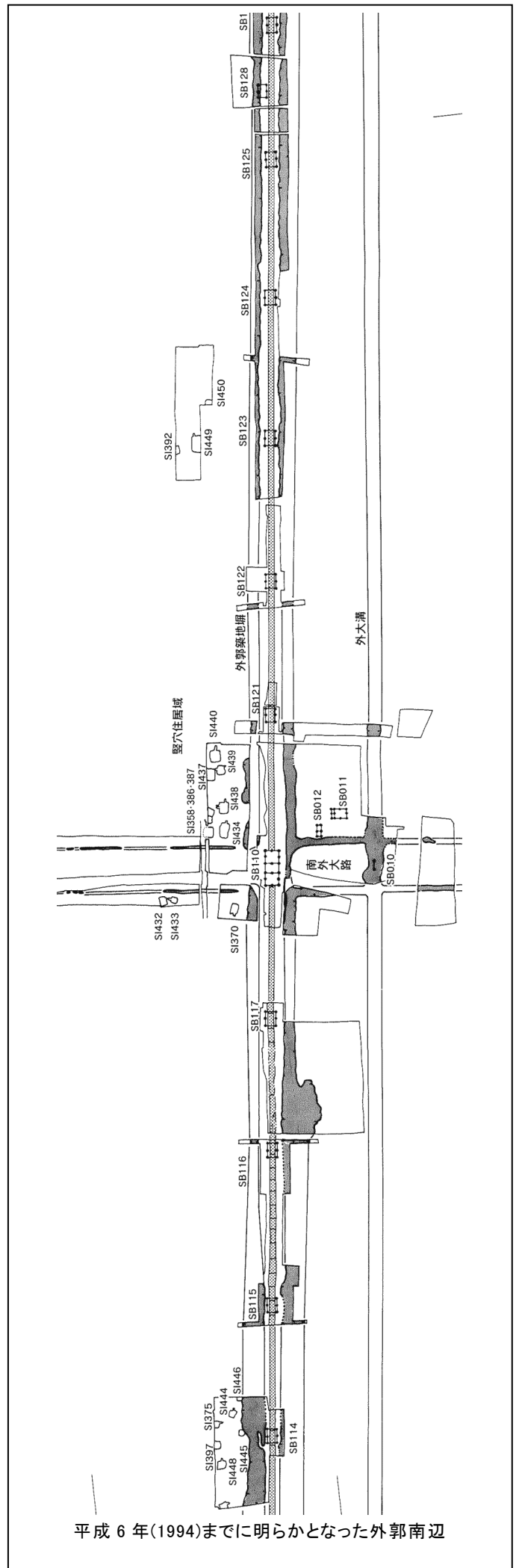
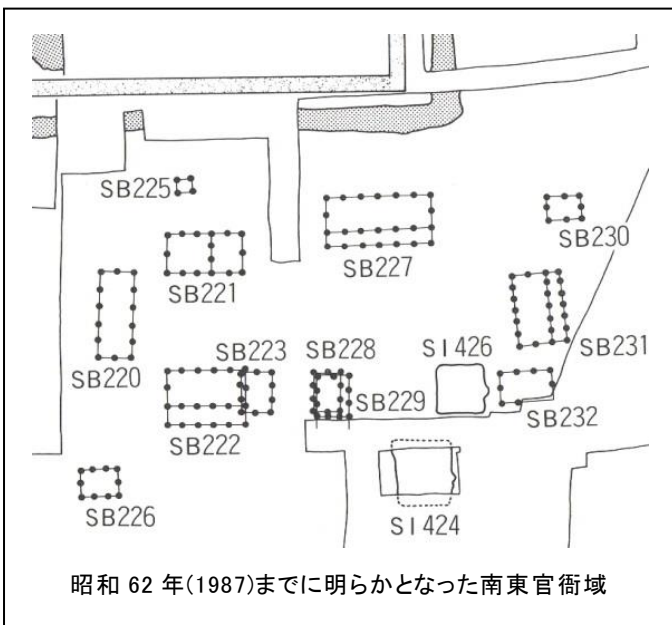
〔史跡保存・整備と発掘調査〕

(昭和 60 年代～平成 9 年)

国史跡の指定を受け、盛岡市教育委員会では、昭和 63 年(1988) 9 月に史跡保存管理計画策定委員会を設置、平成元年 3 月に「史跡保存管理計画書」を刊行、史跡復元整備事業を行う方向性が明記されました。先行して昭和 61 年(1986)からは、外郭南辺の用地取得が開始されており、平成元年(1989) 11 月には史跡整備委員会が発足、平成 2 年(1990) 3 月には「史跡整備基本構想」、平成 3 年(1991) 3 月には「史跡整備基本計画」、平成 4 年(1992) 3 月には「史跡整備基本設計(第 I 期)」が策定されました。

保存管理と史跡整備の計画が進行していく中、昭和 60 年(1985)からは、史跡整備の資料収集のため、政庁脇殿の確認、政庁南東官衙域の範囲確認、外郭南辺買収地の構造究明を目的として、第 3 次 5 ヶ年計画の内容確認調査が行われました。政庁域では西脇殿跡(SB580)と掘立柱建物跡(SB576)、南東官衙域北部では掘立柱建物群(SB227～232)と大型竪穴建物(SI426)、南東官衙域南部では掘立柱建物跡(SB233)と竪穴建物跡群、外郭南辺中央では築地線柱穴列(SF110)・築地内溝跡(SD115)・築地外溝跡(SD110)・竪穴建物群・南大路・南外大路・外大溝跡(SD010)と、多くの遺構が調査されました。

平成 2 年(1990)からは、第 I 期整備工事に伴う外郭南辺・南大路買収地の構造究明と、政庁東方官衙域の範囲確認を目的として、内容確認調査が行われました。外郭南辺では外郭南門跡(SB110)の再調査、築地塀(SF110)本体基底部の調査、櫓跡(SB114～117・122～126)・外大溝木橋橋脚(SB010)・南大路側溝が調査されました。また政庁東方では掘立柱建物跡(SB240・241・246)が発見され、東方官衙域が確認されました。



第Ⅰ期となる外郭南辺の築地塀、櫓、外郭南門、外大溝木橋を復元整備するための実施設計を策定する中で、文化庁の建造物復元検討委員会の審議を受け、平成5年(1993)より文化庁の大規模国庫補助事業として史跡整備工事が開始されました。そして平成9年(1997)の外郭南門復元完成により「志波城古代公園」が開園し、盛岡市初の歴史公園が誕生しました。

〔史跡整備の進展と発掘調査(平成10年代)〕

古代公園が開園した平成9年(1997)からは、第Ⅱ期整備計画策定のため、政庁・官衙域買収地の構造究明を目的として調査を行いました。政庁域では南門跡(SB510)の再調査、正殿(SB500)の再調査、東門(SB530)・東脇殿跡(SB540)・掘立柱建物跡(SB533・534・535)の調査、南西官衙域では掘立柱建物跡(SB249・253・254)・竪穴建物跡(SI459)の調査、南東官衙域では掘立柱建物跡(SB255)の調査がされました。第Ⅰ期整備完了を受け、平成12年(2000)3月に「史跡整備基本設計(第Ⅱ期)」が策定されました。

第Ⅱ期となる政庁築地塀、政庁南門、政庁東門、政庁西門、官衙建物を復元整備するための実施設計を策定する中で、文化庁の建造物復元検討委員会の審議を受け、平成14年(2002)より再び文化庁の大規模国庫補助事業として整備工事が開始されました。そして政庁南門・築地塀の復元完成となった平成15年(2003)には志波

城造営1200年記念事業が行われ、また官衙建物展示室(パネル・映像展示・役人実寸ジオラマを設置)のオープンとなった平成19年(2007)には志波城古代公園開園10周年記念イベントが開催され、多くの来場者を迎えました。

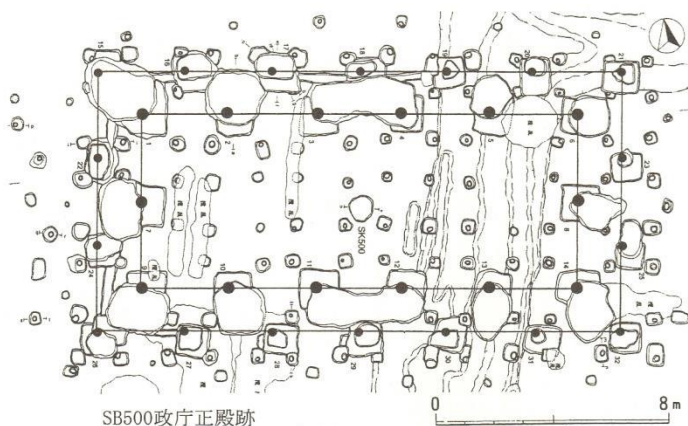
〔整備活用の新展開と発掘調査(平成20年代)〕

平成20年(2008)からは、第Ⅲ期整備計画策定のため、政庁北方、外郭東辺、外郭西辺の買収地の構造究明を目的として調査を行いました。政庁北方では官衙域が展開しないことが確認され、外郭東辺では築地外溝跡(SD140)の確認、外郭西辺では築地塀本体基底部(SF170)、築地外溝跡(SD170)、外大溝跡(SD070)の調査がされました。平成26年(2014)までに、内容確認調査と現状変更対応調査を合わせて、111次を数える発掘調査が行われてきたこととなります。

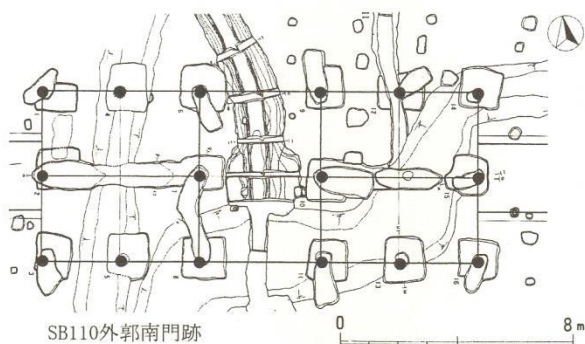
第Ⅱ期整備完了を受け、平成23年(2011)3月に「史跡整備基本設計(Ⅲ)」が策定されました。第Ⅲ期整備のメインは、公園入口ガイダンス施設(パネル・映像展示・体験学習室を設置)の建設と外郭南辺竪穴建物(兵舎)の復元であり、平成27年(2015)3月に竣工・公開となりました。

【参考文献】

- 2012 盛岡市教育委員会『国史跡志波城跡 発掘調査 35周年記念 古代城柵最前線～調査35年の歩み～』
- 2014 盛岡市遺跡の学び館『開館10周年特別展 もりおか発掘物語』図録

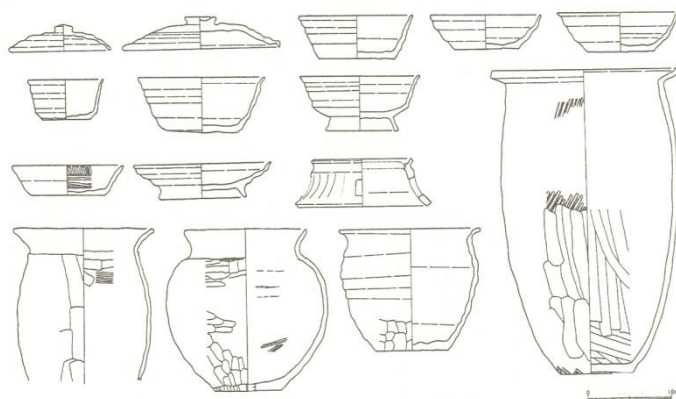


SB500政庁正殿跡



SB110外郭南門跡

政庁正殿跡と外郭南門跡



志波城跡出土土器

志波城古代公園でビデオ映像上映中！

- 「志波城物語」(公園入口案内所)
- 「古代少年しわまるくん」(公園入口案内所)
- 「政庁と官衙の復元」(官衙建物展示室)